

《講演会》

アメリカにおける 大学図書館の現況について

近畿地区国公立大学図書館協議会主催の講演会が去る9月21日、カリフォルニア大学ロスアンゼルス校情報図書館学部長ロバート・ヘイズ博士を招いて「アメリカにおける大学図書館の現況について」という題目で開催された。通訳は図書館情報大学教授松村多美子氏がつとめられた。この講演会には近畿地区の20を超える大学などから80名余りが参加した。

概要：今回の講演は1986年のIFLA（国際図書館連盟）東京大会でヘイズ博士が発表した“UCLAの研究図書館における情報源に対する戦略的計画”がこの2年間でどの程度進展したか、更にこれからの見通しなどを中心になされた。

現代の図書館の直面する問題は様々あるが、中でも大規模な研究図書館のマネジメントの問題が最重要であると思われる。例えばテクノロジーの進歩につれて多種多様な情報源（Information resources）が出現して来ているがそれらをどう管理して行くかといった問題である。

上記の“戦略的計画”というのは Council on Library Resources の資金援助によりUCLAの各学部・学科で具体的にどの様な情報源に対する要求があるかを調査し、これからの研究図書館のあり方について検討し一つのモデルとなるものを提供しようとするものである。これまでの調査から出て来た多様な情報源に対する要求は狭義の（伝統的）図書館の資料のみではなく、印刷物、フィルム、数値データ、デジタルデータなど殆んどありとあらゆる情報源を含んでいる。これらの要求を全学的見地から、更には外部との関係を含めてどう取り扱うかという事を検討する段階に来ている。その場合、現在の図書館の在り方もまさに“戦略的”に検討される事になろう。

《主題別研究集会》

大学図書館のレファレンス・サービス

近畿地区国公立大学図書館協議会主催の主題別研究集会が、10月7日附属図書館3階AVホールにて行われた。講師は慶応義塾大学三田情報センター情報サービス課長の東田全義氏で、17の国公立大学図書館から95名（うち京大は66名）が参加した。

まず、最近の大学図書館をめぐるトピックについて、最近とくに注目を浴びてきたILL（図書館間相互貸借）実施上の問題、特に本来受付側の事情が配慮されるべきところを、依頼者側の都合が優先されてきたこと、去年から今年にかけて、利用者教育に関する研究会が盛んになっており、単なるオリエンテーションでなく、専門課程の学生をも含めた図書館の利用技術に重点を置いた学生集団への利用者教育として位置づけられている。

次いで、レファレンス・サービスにおけるインタビュー技術が、オンライン検索の導入により、その重要性が再認識され始めたが、日本では、このレファレンス・インタビューに関する研究の蓄積がほとんどなく、研究テーマにもなかなかなりにくいことなどが、紹介された。

そのあと、オンライン・データベースについて、同じ単語でもその表記方法で検索結果の異なることが実例によって示され、同義異形、同語異義、類義語、概念の上下関係などの点で限界があり、「従来の検索よりもよくなっていると思わないほうがいい」との指摘であった。

次に、書誌学との関係にはいり、最近クローズアップされてきた目録の遡及入力項目決定に書誌学の知識が必要であるとし、書誌の二つの役割のうち、Information（情報）と Identification（識別）について、両者がレファレンス・サービスとどのような関りがあるのか、について考えたといと前置きして、モンテスキューの「法の精神」とルソーの「エミール」の原書の本版や偽版の標題紙の相違を、細部にわたって比較検討した。また、京大に実際に所蔵されている原書も実物を示